

「郊外」犬山と木曽川　↳大正から昭和を中心に

可児 光 生

一、明治末からの電鉄の伸展と郊外

都市郊外への鉄道延伸は、工業面や軍事面に關心のあった政府運営の官鉄よりも民間経営である私鉄で発案されることが多かった。特に関西圏の中心地・大阪市はめざましい経済成長に伴って人口が急増し（一八九七年七十六万人↓一九一六年百五十一万人）、一九〇三年（明治三六）の南海鉄道、一九〇五年（明治三八）の阪神電鉄、一九一〇年（明治四三）の箕面有馬電気軌道（のちの阪急）など、都市間及び郊外への路線を相次いで開業した。関西地方は全国に先駆けて私鉄王国が形成された。

一九〇六年（明治三九）に鉄道国有法により多数の長距離幹線鉄道が国有化された際に、関西地方の短距離電車会社は定款を変更し、乗客輸送目的以外の遊園地や観光事業を本格的に運営し始めた。郊外リゾートと住宅開発をテーマに電鉄沿線の開発に自らの創意で力を注いだ。一方関東では関西に遅れをとるものの、京王、京成、東急らが激しい郊外開発をすすめた（注一）。

（二）関西の状況

①南海・浜寺公園海水浴場

海辺の開発で発展した南海鉄道の開発・堺市南方の泉北郡浜寺町の浜寺公園の事例を見てみる。

一八九〇年頃までの浜寺は農村であった。絶勝の風景であるにもかかわらず大阪からの距離が遠いために来遊する人々は少なかつたが、周辺の開発を目論む南海鉄道は、一八九七年（明治三〇）に鉄道を敷設し浜寺公園

駅を開業させ、さらに一九〇六年（明治三九）に大阪毎日新聞との共催で浜寺海水浴場を開設すると浜寺の様相は一変する。

『大阪毎日新聞』に掲載された海水浴場開設の趣旨は「帝國海軍賛美思想」にもとづく海事思想の普及であったが、実際には市民の自然に対する親しみ方の変化、余暇利用形態の変化がそれを上回り、娯楽・行楽としての海水浴が市民権を得、海水浴客が膨大に押し寄せた。海上ブランコなどの遊戯施設が年々拡充され、文化・スポーツイベントも盛んに行われた。

一九〇四年（明治三七）、大阪日日新聞の吉浜白眼により浜寺公園紹介パンフレットが刊行されている。これは単なるガイドブックではなく、郊外生活の利益を説明するものであった。自然豊かな景勝地、温和な気候の浜寺は、海水浴場の発展に併せて郊外住宅が開発され、都市有産者層の間で脚光を浴びるようになり、移住者が急増した（注二）。

②阪神電鉄の『郊外生活』

阪神電気鉄道は一九〇五年（明治三八）大阪と神戸間を開通させた。その開業当時から六甲山の開発を進め、一九一〇年（明治四三）頃、六甲・摩耶両山へのケーブルカーの敷設計画を進めるなどした（のち阪神系列の六甲越有馬鉄道が昭和七年に開業）。

一九一四年（大正三）に電鉄沿線居住者を対象として阪神は『郊外生活』と題する雑誌を発行した。海水浴、登山、園芸などの文化活動の様子が紹介され、余暇や行楽のみならず自然への関心を積極的に高めようと意図され、郊外生活が実現すれば清新で活気に満ちた郊外のユートピア気分が味わえたと主張していた。

『郊外生活』では、六甲登山案内やゴルフ、アイススケートの紹介記事を掲載し、住民に自然愛好熱が高まり、避暑地の大衆化がうながされた（注三）。

③箕面有馬電鉄・箕面公園

大阪北部の箕面公園は明治始めに既に開設されていたが、箕面有馬電気

軌道（阪急の前身）が一九一〇年（明治四三）に鉄道を敷設して以降大きな発展を遂げる。同年には箕面動物園（大正五年に廃園）が開園したほか、多くの旅館や料理店を設け行楽客を誘致した（注4）。

経営者・小林一三は、都市民の自然への憧れや郊外生活への関心を利用して、宝塚遊園地、宝塚少女歌劇を事業化し、沿線住宅地を発展させた。発刊されたPR誌『山水水態』は、箕面・宝塚の美しい自然、温泉紹介、宝塚歌劇情報、住宅情報なども盛り込んだ沿線の文化情報誌であった。

一方、会社は、創設期の一九〇九年（明治四二）に公園付近に六万余坪の分譲宅地を用意していた。当時の宣伝パンフレットには「空暗き煙の都に住む不幸なる我が大阪市民よ、郊外生活に伴う最初の条件は交通機関の便利なるにありとす。箕面有馬電車は風光明媚なる沿線に郊外生活に最も適当なる土地を所有し、自由に諸君の選択に委ねんとす」と記しており、悪化している都市の住環境から脱出する手だて、「郊外生活」という新しいライフスタイルを大阪の都市民に対して提案している。

大阪を中心とする郊外電車各社が取った戦略は、行楽、娯楽による消費的性格の濃い経営であった。鉄道会社の交通網の充実と施設整備によって行楽客が増え、郊外の名勝地は様相を変えていった。その背景には経済成長に伴って悪化する都市の住環境（人口増加、大気汚染）があった。そして、自然への関心の高まり、「郊外生活」への憧れが都市民の認識の中に共通なものとしてあった。

（二）大正昭和・旅の形態と目的

生活水準の向上により、国内旅行は大正から昭和にかけて大きなブームとなった。外国人観光客誘致のため鉄道院が主導してジャパンツーリストビューロー（JTB）が一九二二年（明治四五）に発足した。年間運営資

金は半額を鉄道院が支出し残りを私鉄など協賛企業が拠出した。第一次世界大戦の影響で欧米からの観光客が減少し、一方で日本人の旅行需要の増加を受けて旅行代理業務が拡大していく。その手数料収入は年々増加し、一九二七年（昭和二）には会費収入を超えるようになった。国民の生活水準の向上にともなう国内旅行の発展の反映ともいえる（注5）。また、この年は東京日日新聞・大阪毎日新聞主催（後援鉄道省）による日本八景選定の年でもあった。選定されることよって地域の風景を格付けし地域経済を発展させたい地方の思惑があり異常なまでの盛り上がりとなった。自然豊かな景色を国民にあらためて意識させ、ふだんの生活から離れた観光旅行の目的地を想像させることに貢献した。

そもそも日本人の江戸時代後期の「外出文化」は大衆性、多様性において世界でも特筆すべきものであった。四季の景色を愛で、茶屋で食事を楽しんだ。「遊山」と称し都市民は保養・遊興地として「郊外生活」を満喫していた（注6）。

しかし江戸と近代の「外出文化」が大きく違うのは、まず、大正から昭和にかけて鉄道などの交通整備がすすんだことである。余暇を楽しむようになった国民特に都市民の間で、旧来の名所・旧跡に加え新たに観光地となった地を、得られる情報から取捨選択し、便利で新たな交通手段を用い手軽にかつ効率的に外出を楽しむようになっていった。（注7）

目的も近世とは変わった。一九一四年（大正三）に落合浪雄が書いた『郊外探勝その日帰り』（注8）によると、「週日の内に唯一日なる日曜日」を利用して「煤煙に汚れし袂を払ひ」「砂塵に塗みれし耳を洗はん」として郊外へ出、「自然を愛し」「肉体的健康を増進する」ことを旅行の目的としていた。江戸時代と違い、単なる物見遊山ではなく、環境悪化の都会からの脱出、自然の中でのリフレッシュ、健康増進が、新たな旅の目的として認識されてきていた。

二、「名古屋圏」における郊外

(一) 愛知電気鉄道による新舞子の開発(注9)

一九二二年(明治四五)二月 愛知電気鉄道が熱田伝馬町から大野町まで
開通させる。

七月 新舞子土地株式会社(社長：三輪喜兵衛、
常務取締役：手塚辰二郎)設立。

一九二三年(大正 二)六月 新舞子土地株式会社は「舞子館」を建築。

愛知気鉄道、海岸に無料休憩所を設け海水
浴場として広く紹介した。年々賑わいを増
すようになる。

一九二三年(大正二)七月 愛知電気鉄道が新舞子土地株式会社を吸収
合併。海水浴場開発に力を入れる。

一九二五年(大正二四)六月 新舞子文化村(文化住宅分譲)建設着手。

ドイツ風を加味したイギリスのコテージ式。
夏 「新舞子楽園」を開設。野外演芸場、動物園、
夜間照明テニスコートなどを設置。藍川社

長自身もここに引越して指揮をする。

一九二九年(昭和 四) 開発拡張、納涼大棧橋などを建築。

一九二五年(大正二四)に建設が始まった「新舞子分譲土地御案内」(愛
知電鉄事業課作成)には、次のようにその開設の趣旨が載せてある。

「当社沿線海水浴場として知られたる新舞子の一部に文化村を建設しまして
より日に増し付近も開発され住宅地として好適地であることを証明して居
ります。生物が日輪を欲する如く吾等は慰安を欲します。都会の煩雑を避
けた郊外の住宅は恐らく日常に於ける最大の慰安所でありませう。加之此

の地は御承知の如く風光明媚四季に於ける気温温和海辺に近く空気清澄実
に保健の理想郷であります。…」(注10)

愛知電鉄は、沿線随一の海水浴場・新舞子(注：南海電鉄・浜寺海水浴
場の七年後の一九一三年開業)を開発して乗降客の誘致を図る一方、時代
の変化に応じ、文化村の分譲に見られるように、自然を生かした郊外での
新しい生活スタイルを都市民に提案した。

沿線住宅地を開発した「保健の理想郷」としての田園都市的環境は、規
模は関西、関東の私鉄には及ばないものの、ほぼ同じ趣旨で愛知電気鉄道
により部分的に実現した。

(二) 名古屋電気鉄道の郊外北進計画と犬山

① 「日本ライン」と路線拡大

名古屋電気鉄道は、愛知県東北部の郊外三路線を順次整備していく。
一九二二年(大正元)八月に一宮線(押切く西印田、西印田く東一宮は翌
二年一月に延伸)と犬山線(岩倉く犬山)を開通させ、一九一四年(大正三)
一月に津島線(枇杷島橋く新津島)が開業する。電力は創業以来の自給の火
力発電から切り替え、名古屋電燈の木曾川発電所から受電した。

引き続き郊外線の拡張が図られ、一九一四年(大正三)九月に清洲線(須ヶ
口く清洲)、一九二〇年(大正九)九月に小牧線(岩倉く小牧)が開通した。
郊外線は、開業当初は好奇心と運賃半額割引制度もあって盛況であったが、
そのブームが去ると乗客は減少していった。沿線は農村地帯で人口も少な
く交通需要も乏しいため収入は伸びず、建設費の回収は長期間かかると見
込まれた。しかしながら一九二二年(大正一一)名古屋市へ市内線を譲渡
したこともあり、会社規模を維持し更に会社を発展していくために、引き
続き北進策を進めた。一九二〇年(大正九)に犬山く太田間の免許取得し、
一九二五年(大正二四)四月に今渡線(犬山口く今渡間)を、翌一九一五

年五月に犬山〜犬山橋間を、同年一〇月には関線の一部(犬山橋〜新鵜沼間)を新たに開業した。

一九二〇年(大正九)頃からの新規路線開業は単なる通常の乗降客増加策ではなかった。後述するように一九一三年(大正二)、志賀重昂の犬山来訪と「ライン」としての発言(大正二年)と書籍(『続世界山水図説』(大正五年)出版)によって、犬山と「日本ライン」は一躍新たな観光地として脚光を浴びることになり、それら観光地への行楽客の利便と誘致を図ることを主眼として、岐阜県南部の今渡線などを開業させたのである。

観光客が集まる犬山をさらに発展させようと一九二三年(大正一二)に犬山遊園地の計画を開始した。名古屋鉄道常務・上遠野富之助(一九二五年一〇月から社長)は監査役・神野金之助とともに、一九二四年四月から欧米を視察した。上遠野はそこでの体験を踏まえ、犬山城東に五畝の土地を買収、三、三畝の用地で洋風の遊園地を翌一九二五年四月に開設した。スイスのヒュッテにヒントを得た瀟洒な「カンツリー倶楽部」、パークジェントステージ、花壇・植え込みなどが備えられ、二〇〇〇mのグラウンドも設けられた。あわせて宿泊施設として豪華な設備を持つ「彩雲閣」を一九二六年夏に建設した(注11)。

②上遠野と山田芳市

上遠野は当時を振り返り、次のように述懐している。

「将来市内線は厄介なことがあると思つて、甚だ安いと思つたけれども市へ引継いだ。而して名古屋鉄道株式会社を新設して郊外線専門に力を入れようと云うので、名古屋電気鉄道株式会社の市外線を引継ぎ、岩倉から犬山に至るまでは単線であつたのを複線にするとか、高山線に接続する為に犬山から先を延長するとか、今渡に支線を建設するとか拡張に意を用いた。あの大きな木曾川に犬山橋を架けるに就いては時の知事宮尾舜治氏も非常に同感で援助を与えて呉れた。最初私の考へでは鵜沼を

通つて関まで延長する積りで其許可を取つたが、段々研究の結果、とても算盤が採れぬため、それを中止して専ら犬山に力を注いだ。犬山は實に天下の名勝地である。あの水の豊富にして清冽なるは、殆ど他の何れの川も及ぶものはない。私は欧州の各地を視察し、彼の國人の天然の美を賞賛し、其紹介に力を致して遊覧に利便な様に、種々の施設をなして居るのを目撃して歸つてから、木曾川の奇勝を大いに天下に紹介せねばならぬと考へ、それが為め今渡線を敷いてライン下りに便し、又犬山に遊園地を造つて色々の設備を施した。私が此会社の社長になつたのは大正十四年十月の事である。」(注12)

上遠野は欧米視察後、天然の美である木曾川の景観の素晴らしさを再認識、それを経営に活かすことを考え集中的に犬山に資本投入したのである。

一九三〇年(昭和五)一月二五日『新愛知』に掲載された名古屋鉄道(名古屋鉄道)取締役(支配人)・山田芳市「鉄道と兼業」の記事を次に紹介する。「小さな町を縫い合はして都市と都市とを結びつける地方鉄道は、いやでも田園の中を土盛りしなければならぬ。：京阪では沿線に一戸の住宅が建てば一ヶ年に百円の乗客収入があると云われて居る。名古屋付近では、そんなに迄行かなくても一戸の住宅からは相当の電車収入を得ることが出来るに相違ない。遊園地でも、運動場でも同じことである。：地方鉄道が何等の付帯事業を持たず、只電車一つで立つて行こうと云うことは、誠に容易な業ではない。地方鉄道の経営に忘れてならぬものは付帯事業であり、：これを離れては経営の万全を期することはできない。」(注13)

京阪での電鉄事業を参考にしつつ、経営安定のためには住宅、遊園地といった郊外開発が欠かせないという、当時の私鉄経営観が現れている(注14)。山田芳市は幅広い人脈を生かして、犬山、日本ラインを盛んに宣伝した様である。犬山音頭を作つて芸者に覚えさせたりもしたという(後述、注15)。

(三) 実業家・山田才吉の動き

以上のような、名古屋鉄道の北進計画、郊外開発に呼応するように動いた名古屋財界人がいた。山田才吉（一八五二～一九三七）である。

山田は岐阜県出身、名古屋・熱田で漬物屋を開業し、一八八二年（明治一五）味噌粕による漬物を考案し守口漬の元祖となる。この頃より缶詰の製造を考案し、日露戦争の軍用缶詰として大量の注文を受ける。一八八七年（明治二〇）に『中京新報』を創刊し実業家としての活躍が始まる。一八九六年（明治二九）に「愛知瓦斯株式会社」、一九〇九年（明治四二）に「熱田電気軌道株式会社」をおこし、併せて名古屋商業会議所議員、名古屋市議、愛知県議などの公職をつとめた。「大規模建造物病」ともいわれるほど、人が集まる大規模な建物を造ることに精力を注いだ。

① 東陽館と南陽館

一八九六年（明治二九）に名古屋・栄に「東陽館」を建設した。間口約一五〇、奥行き約百十五、収容人員数百人という大規模なもので、広大な園地のなかにあった。庭園には山あり、池あり、四季折々の風情が楽しめる「名古屋名物」「人屋の楽園」とも称される施設であったが、一九〇三年（明治三六）、火災により全焼した（注16）。

次に手がけたのは東築地の「水族館」と「南陽館」である。自分の缶詰工場があった、交通アクセスの悪い東築地に建設する施設の入場客の足を確保する必要があった。山田才吉はまず、一九〇八年（明治四一）に「熱田電気軌道株式会社」を設立、港の将来性を考えて一九一〇年（明治四三）に熱田～東築地間を開業した（同年第十回関西府県連合共進会が愛知で開催、堀川右岸側ではそれに向け名古屋電気鉄道の築港線が新規建設される。）（注17）。

同年、社会教育のために「名古屋教育水族館」を開館、南陽館の建築を進めた。しかし一九一二年（大正元）九月、台風の高潮によって海際近

くにあった完成間近の五階建の南陽館と北側にあった水族館が崩壊してしまった。才吉は懲りることなく南陽館を三階建と規模縮小した上で同地に再建、さらに水族館も木造平屋建に規模縮小して南陽館敷地内に移転再建した。美しい伊勢湾が眺められ、遊園地も併設した娯楽施設であった。水族館が再建される前年の一九一九年（大正八）に熱田電気軌道は名古屋電気鉄道に合併された。経営悪化により両施設とも一九三五年（昭和一〇）に閉館した。

② 北陽館

晩年になって、山田が注目したのは名古屋郊外であった。岐阜県南端の木曾川の船下り拠点施設「北陽館」を一九二四年（大正一三）に建築する（注18）。この地は元々木曾川の川湊として栄えた所であったが、志賀の「日本ライン」賞賛以来、にわかに関光を浴びることとなった。ライン下り出発地（犬山の上流約七km）として開発を目論む地元・三宅徳三郎とともに山田は鉄道開通を見越して整備を進めた。名古屋鉄道（一九二二年までは「名古屋電気鉄道」）は「木曾川の奇勝を大いに天下に紹介せねばならぬと考へ」（上遠野）、ライン下り観光客のために一九二〇年（大正九）の犬山～太田間の鉄道敷設免許を受け、北陽館建設の翌年一九二五年（大正一四）今渡線を開設、最寄り駅「ライン遊園駅」を開業させることとなる（一九二八年（昭和三）ライン遊園駅～北陽館間に直営バス運行）。「ライン遊園」は名古屋鉄道、地元、山田の三者の思惑が一致して進められた開発であった。一九二七年（昭和二）、日本八景に木曾川が選定され、また天皇行幸などもあって有名となり、昭和初期には乗降客が増加してライン遊園駅の貨物取り扱いにも影響を及ぼすほどになった（注19）。北陽館周辺はライン下りのほか、桜、紅葉、松茸、スケートリンクなど四季を通して観光客で賑わった。山田は、焼失した名古屋・東陽館の再現を人工的ではない本物の自然の中、木曾川の景勝地で果たそうとした。名古屋郊外の自然ある新たな観光地を

鉄道の整備と連動させながら積極的に開発を進めた。

名古屋と郊外を結ぶ名古屋鉄道（名岐鉄道）と愛知電気鉄道は一九三五年（合併）の路線は、大正の後半から昭和の初めにかけて拡充され、その目的を四季の行楽やスポーツなど「付帯事業」として幅広くとらえるようになり、特に犬山・木曾川周辺は名古屋実業家も加わって郊外開発が進展した。

三、本多静六の「日本ライン風景利用策」（大正七年）

（一）本多の公園計画

志賀の「ライン」としての発言（一九一三年（大正二））と『続世界山水図説』（一九一六年（大正五））の出版により「ライン」が広く知られるようになり、林学博士・本多静六が「日本ライン」の利用策を提言する（『日本萊因風景の利用策』「大正七年、全二七ページ、整備計画図、写真あり」）。

本多静六（一八六六～一九五二）は一九〇一年（明治三四）の日比谷公園の設計を最初に、明治から昭和にかけて全国各地の公園の設計を手掛けた。その数数百にのぼるといふ。愛知県では明治末の鶴舞公園をはじめ、一九一七年（大正六）以降、中村公園、清州公園、岡崎公園また定光寺公園の設計や改良策に関わった。いずれも史跡の保存と人物顕彰を主たる目的として造られ、松井愛知県知事の県民教化の一環としての政策、位置づけが指摘されているところである（注20）。

また、のち一九二七年（昭和二）の日本八景の選定の審査員を務め、木曾川を賞賛している（注21）。

（二）計画のいきさつ

計画の「緒言」と「前論」に次のようにある。「…今回松井愛知県知事の紹介により村瀬周輔君の囑に応じて是が調査に従事す…」「林学士・上原敬

二」「前愛知県技師三溝謹平、愛知県技師林学士中金鍋三、並に小柳津佐名義の諸氏及び犬山の有志伊藤忠香氏は終始我等の調査に同行し助力せられたる…」

松井愛知県知事（任期・大正二年三月三日～大正八年四月一日）は、中村公園整備に関する県会においての発言の中で、本多に触れ、「農科大学教授ノ本多博士ハ我国ニ於ケルトコロノ公園改良ニ於テハ有名ナル方デアツテ是迄各地ノ公園ニ就テハ其ノ設計ヲ致サレタ人デアリマスカラ、博士ニ依頼致シマシテ計画ヲ立テ…」と過去の実績等から大きな信頼感を表している（注22）。本多は県議会に先立つ3月に、県内三大公園を視察し、松井知事、田村剛らが同行している（注23）。

村瀬周輔は当時、名古屋電気鉄道監査役（一九一七年（大正六）一二月～一九二三年三月）であった。一九一三年（大正二）、他の名古屋実業家とともに犬山・木曾川沿いの山林に出資し不老園土地株式会社を設立、昭和初期に不老園遊園地を開き、鹿を放し飼いにして行楽客を呼び、料理旅館不老閣や香梅園を設けていた（注24）。直接関係する一実業家として関わったと考えられる。提言書に「不老閣」の写真が多くあるのはそのためと思われる。なお、村瀬はかつて（明治二九年）、山田才吉が提出した愛知瓦斯出願者の一人であり、明治三八年当時は尾西鉄道主要株主でもあった。

三溝謹平は、林学者。一九二九年（昭和四）、「日本ライン」の呼称についてそれを支持する発言をしている。

「故志賀重昂氏は、歴史及風景的觀察により其銀の如き江水と、兩岸の故城、残塁が、恰も、ライン河の景色に似ているから、日本ラインと命名したと云う…」「故に木曾川を世界に宣伝するに於て、此有力なる、ライン河を対照とするは、人の頭に入り易くして有利であるを…」（注25）。かつて（一九〇九年）、荒廃していた瀬戸の治山行政に関して県の林務官僚として砂防の必要性を訴えている（注26）。

(三) 本多「利用策」の理念

『日本萊因風景の利用策』の「緒言」で本多は次のように「日本ライン」の特徴を述べている。

「…有体に謂へば日本ラインの景は正に是れ京都嵐山の景を縦横数倍に拡大したるものと云ふべく或は又欧州ラインの風景に更に東洋山水画風の技巧を加味したるものとなすを更に適評と云ふべし。要之日本ラインの山水美は直に是れ自然の神が幾億万年を費して造り成したる精巧無比なる一大美術にして最早之に何等人工美を加ふるを要せざる也是を以て」…本案にして多少今日の風景美を助長し更に隠れたる絶勝を明にし併せて容易に之に行樂するの道を開き漸を遂ふて世界的名勝地或は遊覽地となるに至らば…」

崇高な自然美と愛郷心、愛国心の關係を強調しつつ、その提言の観点は「自然」「風景美」「行樂」であつた。「天然紀念物」としての「山水」「風景」に注目した。

「前論（一般公園發達の大勢及名所舊蹟天然記（ママ）念物保護の必要）」「交通機關」「各方面の特徴を發揮する事」「遊覽娛樂の設備」「其他の設備」の章立てで具体的開發計画を提案した。ポイントを次に示す。

■「市中の商工業愈々繁盛となり市民の生活状態愈々複雑となり人工的、機械的となり神経の刺激、興奮甚しきが為に時々静かなる天然に接し静かに休養するの極めて必要なるを感じ茲に市民の衛生上愈々完全なる大公園を必要とするに至つた。」(p3)

■「結局広大なる自然式の山水風景的になすより外に仕方がない、然るに廣大なる自然式の山水風景は多く山林に存する、そこで市街地に近き所の大山林を公園的に設備する事が自然の大勢となり…市中に於いては地面に限りがあり到底そう云ふ廣大なる面積を取る事が出来ないのみならず元來

朝夕見慣れた所の街の中よりも寧ろ変化を求めて目新しい山手の方などの公園に行く事を喜ぶのである。又近來交通機關發達のため容易に遠方の公園に行き得るやうになつたから随つて廣大なる森林公園の發達を來たしました。」(p4)

■「今、日本ライン風景鑑賞の中心たるべき位置を考ふるに犬山城附近及び不老瀧附近の二箇所あり、前者は余りに遠くして鑑賞に不便多く唯現在の交通機關のみに委しては中心としての価値ある如きも將來は電車を更に延長し不老瀧附近に至らしむべきは地形と風景との關係に徴して推定するに難しからず、又一般風景鑑賞の中心地たる要素を具する点より見るも將來の日本ラインの中心は不老瀧附近を以てするを適當とす。」(p12)

■「天然植物園」「現在のくろまつに更にさくら、かえでを混植し」「天然動物園」「現今都市公園に見るが如き動物を一定の檻内に飼養して觀覽せしむるは時代に遅れたる設備にして…動物は風景の景物として…当地方に最も適當なる鹿を林間に放養して漸次に馴致せしむるに至れば林内逍遙の遊覽客に興を添ふること甚だ大なり。」(p16)

■「各方面の特徴を發揮すること」「自然美としては蘇江一帶の沿岸景色を遺憾なく發揮せしめ」「犬山城」「赤壁右岸の岩屋觀音、之れ福島正則の勳請する処…」(p1819)

■「当地に於ける遊覽の設備は現在に於いて統一を欠くの根あり。…保勝会は現に存在するものを擴張し關係官民一同を以て組織し日本ライン風景の修飾保存、改良に關する事項は細大となく研究することを心がけ時に名士、學者に改良の意見を徴し時勢の進運に遅れざる設備を講ずべし。」(p27) つまり、

○市民生活が複雑になり、神経のストレスを解消する休養と衛生上、大公園、森林公園が必要であること。

○鑑賞のために電車路線を延長して交通の便を図ること。

○木曾川一帯の自然美を發揮した公園にすること。

○現在の植物の植生を生かしつつこの地にあった天然の動植物を導入すること。

○犬山城を含め残されている歴史的遺産を生かすこと。

○保勝会を組織し風景の保存や研究に心がけること。

国民の不健康を解消するため自然の公園が必要とする考え方は、郊外の行楽を求め私鉄が提案している郊外生活の理念にまさに通じるものである。自然美ある地形を生かすこと、これは志賀からつながる地理学者からの観点であるが、加えて歴史的遺産を大切に生かすこと、動植物の現在の生態を尊重することなどを強調している。人工的な整備は最低限にし、あくまでも今あるものの特徴を生かし、風景のまさに「利用策」とすることが本多の理念であった(注27)。

この計画は結局、実現されることがなかった。皮肉にも本多の理念とはむしろ相容れない別の形で公園計画が持ち上がることになるのである。

四、新たな名所の創出

(一) 福沢桃介 貞照寺大遊園地計画(昭和三年)

犬山市の対岸、木曾川右岸の現在各務原市最東部の鵜沼地区(注28)は、一九二二年(大正一〇)の高山線延伸、一九二四年(大正一三)の犬山橋の開通によって、別荘・保養地としての開発が始まった。犬山橋の架橋に深く関わった愛知県海部郡代議士・三輪市太郎が別荘を建てた(注29)のは一九二一年(大正一〇)、のち岐阜で毛織業を営んでいた後藤毛織は一九二四年(大正一三)ころに保養所を構えた。

景観の良い保養地として注目されつつあったその鵜沼地区に一九二八年(昭和三)に福沢桃介は「大遊園地計画」を発表した(注30)。福沢、実業

界から引退直後であった。

一九二八年(昭和三)七月五日の『新愛知』によると

「大遊園地を福澤氏がつくる 日本ライン沿岸に 観音像も奉安

さき頃電力界を引退して、余生を趣味生活、信仰生活におくろうと伝えられる福澤桃介氏は、一代の知恵袋を絞って民衆的大遊園地を日本ラインの沿岸犬山橋上流の、岐阜県稲葉郡鵜沼村地に建設することとなった。同地は、愛知県丹羽郡継尾山の対岸にあたる景勝の地で、同氏並びに股肱の兼松熙氏の所有地を加えたものに、人工的設備をいろいろ施し公会堂みたいな大きな休憩所を建て、何人も自由に遊び得るよう施設されるそうであり、その園内に日頃信仰する観世音を奉安する寺院を建て、新しい信仰地、新名所をつくるべく計画されている。猶、木曾川を横断して対岸に架空線を設け、ラインの清流を脚下に跨いで美濃・尾張を自由に往来するよう目論まれているが、木曾川べりに一大新名所が出来る訳で、大事業家福澤氏が余生を大衆の為に、信仰の為に尽すのは、最も意義あることであろう。」

兼松熙(ひろし)は鵜沼の東隣の加茂郡坂祝町に生まれ、加茂郡役所、岐阜県などに勤務し、のち一九〇四年(明治三七)衆議院議員、明治三九年名古屋電力、濃飛電気を創業し、福沢桃介に重用された。地元である兼松の協力のもとにこの計画は立てられた模様である(注31)。

貞照寺宝物庫に収蔵されている建築図面に佐藤四郎建築事務所印が押されている。佐藤は桃介に請われて大同電力に入り、木曾川の一連の発電所の設計を手がけた人物である(注32)。

また、貞照寺には、「昭和八年十月 名岐鉄道株式会社」の銘の石灯籠が一对建立されているものの、名鉄はこの計画に直接的に関与していないようである。前『新愛知』の記事(一九二八年)の後段に次のようである。

「名鉄支配人談 又、名鉄支配人山田芳市氏は語る。大伽藍など云うことは未だ聞いて居ないが、継尾山の対岸に民衆的遊園地を作り架空ケーブルカー

で遊客の往来を図る様にしたいとか、その地方の集会所に充てる為、公会堂見たいなものを建てようとか、一部を別荘にし、一部を開放してやろうとかなど、いろいろな説があつて、まだはつきり定まつて居ないように聞いて居た位で、私は何も聞いて居ない云々」

この計画は、結果的に一九三二年（昭和六年）に貞照寺が完成するものの、全体は実現を見なかった。

「吉田初三郎との関係」

一方、一九二三年（大正一二）、当時名古屋鉄道常務であつた上遠野の招きで犬山に画室を構え、全国各地の観光地を駆け回つていた絵師・吉田初三郎（詳細は後述）と、福沢のパートナー川上貞とは旧知の間柄であつたようである。吉田は京都での画業修行中、「演芸文庫社」を創立した。そこでの演劇報道の仕事をとおし、川上音二郎、貞奴氏と交流があつた（注33）。吉田は当時各地の新しき名所の開発に関わつていた。叡山電鉄ケーブルカー・遊覧架空索道（京都電灯、昭和三年）や別府金山ケーブルカー（昭和四年）、高野山ケーブルカー（昭和五年）など（注34）、日本に新しく導入された架空索道交通の観光案内図を作成しており、吉田の持つていた最新情報がこの計画に影響があつた可能性もある。

「本多静六との関係」

さて計画を立ち上げた福沢桃介と、前述の林学者・本多静六とはかつて接点があつた。『本多静六自伝体験八十五年』（注35）によると、一九一三年（大正二）四月、京都府の宇治川水力発電所の建設について風景美保存の観点から京都府知事大森鐘一から周囲の風景と調和するように復旧する依頼を受け、設計立案をした。そこで「新興産業と風致問題が起き：風致国日本と産業国日本との衝突はいずれに軍配を揚げるのもなかなかむづかしい問題だ」と本多は述べている。

また、一九二二年（大正一〇）には長野県の大岡電力（社長福沢桃介）によるダム建設に関して地元民との紛争が起きた際、「福沢社長の懇請で、助手の永見農学士と共に現地へ出張…、発電計画の遂行も大切であるが、自然の保存もまたゆるがせにできない。…寝覚の床が渇水期にも乾上がった殺風景を呈しないのみか、一年中最も美しい風景美を發揮した四月の消雪期と同じ状態を保ち得られる」よう、設計変更案を提出した。このように本多静六は全国各地で、風致と産業の「衝突」の調整のために奔走していたことが窺える。

（二）吉田初三郎 桃太郎公園計画（昭和五年）

①吉田の活動と発言（注36）

一八八四年（明治一七） 京都に生まれる。

一九一三年（大正二） 別府から鳥瞰図の制作依頼がある。亀の井旅館・油屋熊八との交流はじまる。

一九一四年（大正三） 皇太子（昭和天皇）が京都の貴賓電車内に掲示されていた吉田の「京阪電車御案内」を賞賛。

これに発奮し「図画報国」との考えを持つようになった。以後各地を写生旅行。大阪時事新聞は「大正の広重」と激賞。

ジャパンツーリストビューロー主催の内外旅行案内記類展覧会に三〇点余出品。

一九一九年（大正八） 居を東京品川に移し、銀座に店舗を開設する。

一九二一年（大正一〇） 宮内省式部官・二荒芳徳（ふたらよしのり）、皇太子の四国巡遊に吉田を同行させる。

一九二二年（大正一一） 八月、名古屋鉄道常務・上遠野富之助（のち

一九二三年（大正一二）

社長)の招きにより、門弟・前田虹映、稲垣満一郎とともに大山を訪れ風光に魅せられる。九月関東大震災が起り、東京の画室、店舗が焼失。上遠野により木曾川沿いの「蘇江俱樂部」が提供され画室とする。以後東西の名士などが詰めかける。

一一月、愛知県下陸軍特別大演習。二荒芳徳の提案により大本営内に「愛知県鳥瞰図」が掲示される。以後、大演習ごとに当該府県の鳥瞰図掲示が恒例化し「天皇の絵師」ともいわれる。

鉄道省八景実行委員、大阪毎日新聞東京日日新聞囑託として八景二十五勝を踏査写生。大阪毎日新聞社長・本山彦市が能力を認め支援する。

犬山・栗栖に伝わる桃太郎伝説に感激し、「桃太郎会」発会式を春、犬山演舞場で行う。巖波小波、鳥居龍蔵ら招待される。

犬山・栗栖に桃太郎神社を創建、自ら日本一桃太郎会会長に就任。

六月、犬山町で日本一桃太郎祭り盛大に開催される。

一九三六年(昭和一一) 本拠を八戸市に移転。

一九五五年(昭和三〇) 没(71才)。

吉田は生涯千六百点もの作品を残したといわれる。描いた鳥瞰図には溪谷美や大自然が繰り返し登場し大切なモチーフとなっている。時にはデフォ

ルメされたパノラマ仕立ての絵画は、各地の名所、名勝の探訪する国民の機運を高めるのに大きな効果があった。また、観光広告の領域でも大きな役割を果たした。(注37) 吉田の行動は、単に絵師、商業画家にとどまることはなかった。

才能を認められた二荒芳徳の支援から「天皇の絵師」としての存在を築き、また本山彦市らジャーナリストや文化人から支援され、様々な場面で発言をし全国レベルの観光政策にも関与した。幅広い人脈を活用して一九二八年の日本八景の「木曾川」選定にも影響を与えたともいわれる。

「されば風景の風日本を全世界に進出せしむべく…、ジャパンツーリストビューローは時局に鑑みるところあって、吉田初三郎先生筆の名所鳥瞰図を世界に示してその真価を問わんとせらるる計画あり」(注38)と活躍は世界に羽ばたき、国内の娯楽については、

「…山に海に湖畔に河辺に温泉に、緑陰と涼風をおうて煩雑なる都市生活を離れ、苦熱の井路を脱れて大自然の懐へ還る…」(注39)と、現代社会から切り離すことのできないもので、既に娯楽遊覧の域を離れ、実際的に家庭の浄化を図る最もよき手段の一つであり、平凡化せんとする一家の空気を、一掃転換する最も賢明な策である。(注39)と、発言し、現在では当たり前となっている家族旅行を提唱した。

②犬山での動き

犬山での活動は、一九三三年(大正二二)の関東大震災後、名古屋鉄道常務・上遠野富之助(のち社長)の支援により画室が提供されたことに始まる。「犬山は實に天下の名勝地」と位置づけていた上遠野としては、吉田は願ってもみない存在であった。以後一九三六年に転居するまで、作品制作と出版活動の拠点となり多くの文化人などが集まる場となった(注40)。

易経の「国の光を觀る」に由来するといわれる「觀光」という言葉は、大正末ごろは主に海外旅行をさしていたとされるが、初三郎は自ら経営した

印刷会社を「観光社」と名付け、また雑誌『KWANKO（観光）』を一九二五年（大正一四）に創刊（のち昭和三年に『旅と名所』に改題）した（注41）。また、犬山地方新聞『ライントタイムス』を発刊し、観光客誘致と地元に対する事業の広報普及を図った（注42）。

犬山は、上遠野が中心となつて一九二五年（大正一四）四月に「犬山遊園地」を開設、一九二六年（大正一五）に犬山・新鵜沼間が開業するなど、犬山は名古屋鉄道により徐々に開発が進んでいた（注43）が、名古屋圏の観光をより発展させたい思いがあつたのであろう、吉田は自ら新たな観光地形成を考える。

③ 桃太郎伝説

一九二九年（昭和四）、考古学者・鳥居龍蔵が犬山・栗栖地区（当時丹羽郡城東村内）へ遺跡・ストーンサークルらしい石群の調査に来る（注44）。その石群の脇の「桃山」に「子守社」があつたため、調査を発端として吉田は遺跡と神社を関連付けさせた。「子守社」を移転した上で「桃太郎神社」と改称した（建物は、昭和三年に着工、同五年に完成）。「桃太郎発祥伝説地に関する一考察」を著わしたほか絵葉書を刊行するなど、あらたな観光名所づくりを目論んだ（注45）。

一九二九（昭和四）、「桃太郎会」発会式を犬山演舞場で行なう。招待客に巖谷小波（注46）、鳥居龍蔵らがいた。初三郎が自ら会長として資金を投じ、春秋二回桃太郎祭を行い、「純日本一桃太郎主義」を鼓吹しつつ、自らの絵画を頒布して桃太郎発生地を喧伝した。

一九三〇年（昭和五）一〇月の『日本一桃太郎會規約』（名鉄資料館所蔵）によると、「本會は日本国民性の発露、日本一の英雄児桃太郎の事蹟に對し趣味と愛敬を有し、併而本會の規約を賛同遵守し御援助賜はる方々を以て組織致します。」「本會は日本一桃太郎を正義任侠の神と仰ぎ、桃太郎誕生地の保勝し、…宣伝鼓吹の機関雑誌を発行し合理的に国家教育を補け

思想善益に努力致します。」としている。会長・吉田のほか役員には、副会長・後藤利兵衛（名古屋市）、名古屋支部長・小川善三郎（名古屋市）、議員に大津二郎（名古屋鉄道社内・秘書課長）他の名がある。また、名誉顧問に大隈信常（侯爵）、顧問に鳥居龍蔵、巖谷小波、鹿子木孟郎（京都市）、富田重助（名古屋市）（注47）らがいる。富田、大津らが会の関係者に名を連ねていることから、名古屋鉄道も吉田の桃太郎神社開発に協力体制を取っていたと思われる。

自ら主宰する『観光タイムス』（昭和六年一〇月一五日号）は次のように伝えている。

「日本一の英雄児、お伽の國の王様、仁慈と任侠と武勇の神として日本ライン河畔栗栖のほとりにまつらるる『日本一桃太郎社』の存在は桃太郎誕生の聖地と共に、今では日本ラインになくはならない新名所となり、日本一桃太郎會が催す春夏二季の『桃太郎まつり』は對内的は勿論對外的にも新興日本のゆゆしき祭りの一つとして報導され、会長吉田初三郎画伯が謹筆せられたる『桃太郎尊像』の一幅は、全国数萬の會員が一家円満幸福の守護神として、従来悪鬼退治のシンボルとせられたる支那の鐘鬼にとつて代り健康そのものの如き美少年ぶりを發揮しつつ、子供の神と崇められてゐる次第である…。（副社長 前田虹映）」

このように吉田は自らの手で名所を創出し、観光振興に役立てようと躍起になっていた。

名古屋圏の観光に関して、一九三三年（昭和七）吉田は、『日本電報通信』に「昭和七年を迎ふるに方り観光都市名古屋に待望す」を寄稿し、そこで中藤村男爵（国立公園選定特別委員会）の発言を次のように引用している（注48）。「名古屋人の観光事業への不熱心、冷淡さは言語道断のものがある。名岐、愛電（いずれも名鉄の前身）の当事者もあり、名古屋城や日本ライン、蒲郡、知多半島の名勝を抱えながら山陰の松江や大和・紀伊の寒村に遅れを取る

のは先見の明がないからだ」と紹介し、全国の他地域に比較して力の入らない名古屋圏の観光政策の現状を嘆くと同時にこれからの期待を語っている。

(三) 「風致」と「産業」

一九一八年(大正七)の本多静六「日本ライン風景利用策」の提言から十年を経て、福沢桃介の「大遊園地計画」(一九二八年〔昭和三〕)、そして吉田初三郎の「桃太郎神社開発計画」(一九三〇年〔昭和五〕)が打ち出された。福沢は国内では珍しいケーブルカーといった壮大で人工的設備と新しい信仰施設、吉田はやや強引ではあるが桃太郎伝説を作り上げ、新たな名所を創出することで行楽客を呼び込もうとした。これらは、木曾川・犬山の景観を生かした自然との調和という、本多の風景観や理念とは遊離した作為的計画であった。本多の言う「風致」と「産業」、開発に際しての認識の違い、対立の構図が垣間見える。

五、地元の動き

(一) 犬山町民の意見：雑誌『知仁勇』から

日本八景選定後、犬山町ではそれを記念して「今後の木曾川(日本ライン)をして益々日本八景の名を輝かしむるには、いかなる保護、いかなる施設を要すべきか」と犬山開発についての意見を各方面に求めた。犬山壮年会雑誌『知仁勇』(三〇〇号、一九二七年〔昭和二〕九月二五日発行)に、その結果七名の回答が紹介されている(注49)。

「天然記念物の保護、特有植物の保護増殖、流域より見ゆる俗悪なる家屋・広告の厳禁：」「今日世人が見て美観に打たれたる現況即ち当選したる所以の美点を保存することが必要なり：」(成瀬美雄)

「一、恵まれたる大自然をあくまで擁護する事 二、時勢にふさわしき近代

的施設は自然を冒瀆せざる範囲たるべき事：」(鈴木敏也)

「河岸の別荘などは今後の者には不愉快の度が高く感ずるであろうと同時に、自然を打破する悪魔である」(後藤吉三郎)

犬山町民の意見の基調は、まず郷土の貴重な自然と天然記念物を誇りを持って保護し、その上で調和のとれた観光化を進めるというものであった。

(二) 犬山踊と犬山音頭の創作

観光の進展により、地元では唄や踊りで郷土を盛り上げる動きがあらわれた(注50)。伊勢門水は「犬山踊」のほか、洒落物画文集『名古屋祭』、長唄「四季の犬山」、新曲犬山踊「桃太郎」、御大典記念「日本八景木曾川」などを作歌、犬山の風景を巧みに描写した。一九三二年(昭和七)没(注51)。犬山踊については当時名古屋鉄道取締役・山田芳市も関与し(前注15)、遊園地施設との関連行事も盛んに行った。また、野口雨情が犬山音頭の作歌をし、犬山の観光に貢献している。犬山は名鉄と連携をとり、町をあげて新たな観光資源を開発しようとしていた。

一九二六年(大正一五)一〇月 一日 伊勢門水が犬山警察署長、神谷犬山町長などを交えて踊(犬山踊)創作の協議。

一九二七年(昭和 二) 一月二八日 町長、署長、名鉄重役、地方新聞社などが集合し、批評会開催。

二月二〇日 犬山町協賛会の主催にて犬山町相生座にて犬山踊披露会を開催。

二月二六日 たまたま野口雨情ほか講演のため来町。その前で犬山踊を披露。

野口から好評を得、是非民謡を加

えたらとの提案により、その日と翌日をかけ野口は「犬山音頭」を
作歌する。

四月十五日 名古屋電鉄会社により犬山遊園地

内に犬山演芸館が落成。

以後定期的に犬山踊を一般に公演
する。

五月 一日 大阪高島屋へ遠征公演。

(三) 郷土刊行物の制作

地元では、志賀重昂以来むしろ外部から犬山の魅力を知らされることとなった。それに対し、郷土の良さを改めて見直し、地域アイデンティティーとしてそれを発信していく動きが見られるようになった。郷土誌や観光ガイドなどである。八景選定直後の天皇犬山行幸の日(昭和二年一月二〇日)に合わせ、土岐二三は『日本八景木曾川探勝案内』を出し、木曾川の素晴らしさを広く伝えた。また、林照太郎『木曾峽遊記』(一九三一年〔昭和六〕発行)、犬山近隣でもライン下りの発展や名勝指定にも関連して、可児柗太郎『美の太田』(一九三一年〔昭和六〕)、太田商工会発行、三品小太郎『坂祝区郷土誌』(一九三三年〔昭和七〕)などが続々発刊された。

六、まとめと課題

・ 関西圏に比べれば規模は小さいものの、名古屋圏においても鉄道の整備にともない、新舞子の海水浴場と住宅分譲の例に見られるように、都民のために一定の郊外開発の戦略がすすめられた。

・ 志賀が命名した「日本ライン」が脚光をあび、それに連動して名古屋鉄道は資本を投入して鉄道網を拡充、「付帯施設」としての娯楽施設を整備し

て観光客を誘致し、名古屋実業家も加わって郊外である犬山と木曾川の開発を推進した。

・ 本多静六の「ライン」利用策は、林学者ならではの土地の形状や自然美を生かすことを基本とし、加えて、人工物をできるだけ避け、歴史的遺産を保全し、その地にある動植物の生態を尊重した調和ある計画であった。

・ 犬山周辺では、福沢桃介と吉田初三郎が様々な人脈を生かし観光開発の手段として新たな名所の形成を計画するが成功までには至らなかった。

・ 福沢と吉田の新名所の開発計画は、風致や景観の保存と開発をどのように調和させて進めていくかという現代につながる社会的課題を内包している。

・ 自然や景観に関して、郷土愛の象徴・誇りとしてそれを意識する住民、生活の向上や近代交通の発達によつてそれを利用とする都民、さらに地域開発を進める事業主体者、その三者の認識や風景観の相違と対立、さらに時代による変容を、具体的事例から捉えていくことが重要である。

(かに みつお 美濃加茂市民ミュージアム館長)

【注記】

- (注1) ジェイムズ・A・ワジイ「消費のネットワーク」『日常生活の誕生 戦間期日本の文化変容』柏書房、1997年、p258～261。
- (注2) 竹村民郎『笑案の系譜』同文館出版、1994年。
- (注3) 竹村民郎『増補大正文化帝国のユートピア』三元社、1990年、p233～235。橋詰紳也『モダニズムのニッポン』角川書店、1996年、p230～235。竹村民郎『笑案の系譜』同文館出版、1994年。
- (注4) 丸山宏『近代日本公園史の研究』思文閣出版、1994年、p254～261。ほか。
- (注5) 永江雅和『近代日本の旅と旅行産業 JTBを中心として』『人は何を旅してきたか』専修大学出版局、1999年、p101～110。
- (注6) 白幡洋三郎『旅と「発見」西洋見立ての理想郷、江戸郊外の王子』『旅と日本発見』国際日本文化研究センター、1999年、p12,13。
- (注7) 東京都江戸東京博物館『美しき日本 大正昭和の旅 展』1995年。
- (注8) 梅田定宏『日帰り行楽地』多摩の誕生』『特別展 郊外行楽地の誕生』バルテノン多摩、1991年。
- (注9) 『名古屋鉄道社史』名古屋鉄道株式会社、1961年、p492～494,508～510。『名古屋鉄道百年史』名古屋鉄道株式会社、1994年、p170,171。
- (注10) 前掲『名古屋鉄道百年史』p171。
- (注11) 前掲『名古屋鉄道社史』p473～477。前掲『名古屋鉄道百年史』p80～83,119～121。
- (注12) 上遠野亮三、上遠野富之助『上遠野富之助病中雑話』1928年、p61,61。
- (注13) 前掲『名古屋鉄道百年史』p168。
- (注14) 当時の会社の経営状況を見ると、対収入利益率の数値が大正一四年の49.6%をピークに、昭和に入ると減少し始め昭和6年には、24.4%まで落ち込んだこと(前掲『名古屋鉄道百年史』p172)。
- (注15) 松本清右衛門『中部財界史』中部財界史刊行会、1955年。
- (注16) 杉浦英一『中京財界史』中部経済新聞社、1956年。服部鉦太郎『明治・名古屋の顔』六法出版社、1973年。
- (注17) 林上『近代都市の交通と地域発展』大明堂、1990年、p184,185。
- (注18) 絵葉書「日本ライン遊園地御料理旅館北陽館」〔名鉄資料館等所有〕等から大規模建築物であったことがうかがえる。
- (注19) 「ライン遊園停留所から停車場への変更申請書」『可児市史料編』ほか。
- (注20) 石川寛『三大公園の創造』『愛知県史研究』No.15、1991年、p79～81。久喜市総務管理課「日本林学会の巨匠本多静六」パンフレット。
- (注21) 志賀矧川氏等之を風景世界に冠たる萊因の流れに擬して、夙に「日本萊因」と称做して激賞措かざるこや。…「有体に謂へば日本ラインの景は正に是れ京都嵐山の景を縦横数倍に拡大したるものと云ふべく或は又欧州ラインの風景に更に東洋山水画風の技巧を加味したるものとなすを更に適評と云ふべし。要之日本ラインの山水美は直に是れ自然の神が幾億万年を費して造り成したる精巧無比なる一大美術にして最早之に何等人工美を加ふるを要せざる也…」
- (注22) 一九一七年(大正六)一月二六日「愛知県通常県会会議録」『愛知県史資料編25』1999年、p401。
- (注23) 『新愛知』大正六年三月二八日、『本多静六通信』第一一〇号、一九九九年。
- (注24) 前掲『名古屋鉄道社史』p172。
- (注25) 史蹟名勝天然記念物』第四集 12号、昭和四年。
- (注26) 羽賀祥二「明治後期愛知県の治山問題」二〇〇四年「環境史プロジェクト」発表。
- (注27) 本多の理念は、他の公園設計においても共通するものがあった。例えば「長野県須坂町公園設計案」(『本多静六通信』第7号、一九九六年)などで読み取れる。
- (注28) 鵜沼丘陵地は明治以来極度のハゲ山で、ダレーケも危険箇所として指摘したことがある。梅田薫『新鵜沼の歴史』鵜沼歴史研究会、二〇一一年ほかによる。
- (注29) 関係する企業関係者が別荘を所有する傾向については、老川慶喜「箱根開発と箱根土地会社」『都市・近郊の信仰と遊山・観光』雄山閣、一九九九年、鈴木康弘「神奈川県域における別荘地形成について」『地方史研究』274、一九九八年八月、など詳しく。
- (注30) 横山住雄他『鵜沼町百年史』創文出版社、一九八八年、p129～130,168～169。
- (注31) 前掲『鵜沼町百年史』によると、計画地は鵜沼南町の共有林であるが、兼松の尽力でこの共有地を入手したとある(p.129)。
- (注32) 西和夫「川上貞奴の菩提寺貞照寺と別荘萬松園」『歴史と民俗』神奈川大学日本常民文化研究所、二〇〇七年、p7～p34。
- (注33) 昭和六年一月一日『観光タイムス』には次のように記されている。
「茲に其の境内並に桃太郎屋敷遊園地とは、日本ラインの川一重を距てし對岸鵜沼の地に、今回新しく鵜沼不動尊貞照寺といふのが建立され、去る九月廿八日賑々しい上棟式が挙行された。是れは往年の名女優川上貞奴氏こと川上貞子女史の発願によるもので、既に六間四面、向背つきの堂々たる本堂、石階庫裡等は完成され、三間中の参道は松林を縫うて街道より本堂へ導いてゐるので茲一兩年のうちに此の境内が完成されるなれば、是亦、桃太郎社に劣らぬ日本ライン沿岸の新名勝となるであらう。…画伯が主宰する桃太郎会の本部『日本一桃太郎社』のまん向へに、川を距てて貞照寺建立といふいとも奇しき因縁を

結ぶこととはなつたのである。(副社長 前田虹映)」

(注34) 吉田初三郎『叡山鉄道御案内絵葉書』一九二八年ほか。

(注35) 本多静六『本多静六自伝体験八十五年』実業之日本社、二〇〇六年、p204～209。
「一九五二年『本多静六体験八十五年』の再刊。」

(注36) 芳賀直樹ほか『吉田初三郎のパノラマ地図』(平凡社、二〇〇二年)などから作成。

(注37) 前掲竹村民郎『笑楽の系譜』p117,119。

(注38) 『觀光春秋』観光社(名古屋市外犬山町日本ライン蘇江)、一九二八年二月号。

(注39) 吉田初三郎『日本八景名所図会・絵に添へて一筆』日本八景一九三〇年(昭和五)、『主婦之友』八月号付録。

(注40) 松永直幸『鳥瞰図絵師吉田初三郎と犬山』未定稿、二〇〇四年。

(注41) 京都府立総合資料館HP『京の鳥瞰図絵師 吉田初三郎』二〇一二年。

(注42) 矢内一磨『吉田初三郎その生涯と作品』二〇一二年。

(注43) 「かくして私が此の日本ライン蘇江河畔に飯室を営み、名所図絵芸術に精進の日を捧げてから、既にもう六年の歳月が流れる。…其の六年は実際めまぐるしいような変化と進展の跡であった。…いつか白垂の大鉄橋が清らかに竣工し、建築物の並んだ遊園地や、不老滝路、蘇江のあたり、棧を面白く配った山道もしつらへられて、東西より探勝者ひきもさらぬ有様…」吉田初三郎『絵に添へて一筆集』一九二八年。

(注44) 鳥居龍蔵『尾張の旅より』『武蔵野』昭和四年二月号の記事より、昭和四年二月八日と判断できる。

(注45) 横山住雄『犬山歴史散歩』濃尾歴史文化研究所、一九九七年。堀田稯HP『桃太郎神社と貞照寺』二〇一二年。

(注46) 巖谷は日本の児童演劇を提唱し、川上音二郎、貞奴一座はこれに共鳴した。音二郎の死後、一九二四年(大正一三)に福沢桃介の支援により東京玉川に学園「川上児童劇団」が建設された。翌一九二五年(大正一四)に名古屋御園座で児童劇の第一回公演を行う。一九二六年には帝国劇場で「桃太郎」などを上演した。(各務原市歴史民俗資料館『かみ野の風土』二〇〇四年)。また、『日本八景木曾川探勝案内』では犬山について巖谷は「洋々たる大江の流れ、其兩岸に巉々たる山があり、其山が又夫々の史蹟伝説に富んで居る」とし、また桃太郎神社には句碑がある(犬山市『犬山市史通史編下』一九九五年)。(注47) 四代富田重助(一八七三?)。当時名古屋鉄道(昭和五年九月五日より社名「名岐鉄道」)取締役社長。初代神野金之助の甥にあたる。妻は金之助の娘あさ(いとこ)。「都築晶」地方資産家における家憲の制定と資産管理」二〇一二年、日本の経済思想例会上智大学発表」などより)

(注48) 『日本電報通信(名古屋)』元旦号。前掲『吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社、

二〇〇二年、p94。

(注49) 犬山市教育委員会『犬山市史通史編下・近代現代』一九九五年、p209,210。

(注50) 一九二〇年代の民謡については、坪井秀人『感覚の近代』名古屋大学出版会、二〇〇六年に詳しい。

(注51) 日比野正治『郷土史閑話』鶴かご川柳社、一九九三年。

美濃加茂市民ミュージアム 紀要

第13集

2014年（平成26）3月発行

編集・発行

美濃加茂市民ミュージアム

岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋 3299-1（〒505-0004）

TEL 0574-28-1110 / FAX 0574-28-1104

<http://www.forest.monokamo.gifu.jp/>

印刷 有限会社 永田印刷